



シルクロードを拓いた張騫 (史記の中の冒険家③)

6月③のごあいさつ
山内公認会計士事務所
2022年6月21日(火)

「漢の武帝」は、漢の充実を背景に世界帝国の建設を計画した大皇帝であった。そのために、建国以来の強敵である「匈奴」の討伐を計画し、匈奴に怨みを持つ「西域の大月氏国」と共同作戦で匈奴を挟撃しようとした。

先ず前138年、武帝は大月氏国への使者を公募した。その募集に応じた青年官僚が「張騫」であった。その当時、中国と西域の交通は未開発でこれは史上初めての試みであり、後世、「シルクロード」として歴史に知られる世界を一体化する大事業であった。

匈奴は、「大単于冒頓」の誕生によって漢の北西方に広大な版図を構築し、しばしば漢の国境線をおびやかした。

これに対し漢も「衛青」、「霍去病」、「李広」らの名将、猛将を繰り出し、死闘が展開されていた。武帝は、匈奴の勢力圏を越えて、さらにその北西方の国際情勢をさぐるべく、張騫を送り出したのである。

張騫は、匈奴人の「甘父」という男を引きつけて総勢100人余で出発した。一行は匈奴領内を通過中に、果たして捕えられ、張騫は単于のもとに送られた。単于は、「月氏と言えわが領国より北ではないか。おまえを月氏には行かせない。仮にわしが「越」に使者を出したら漢が黙って通すと思うか。」

張騫は匈奴に拘束されること十余年、ついに隙をみつけ、大月氏に向かって逃亡した。

西へ西へと道を取り、数十日の後に先ず「大宛」に到着した。かねてから漢との通商を望んでいた大宛の王は、一行に道案内と通訳をつけて「大月氏国」へ送り届けた。「大月氏国」は、肥沃な土地に恵まれ、平穏な日々を送り、匈奴に報復する気も、協力して漢と匈奴を打つ気もなかった。その2年余り後張騫は漢に帰国した。出発した当初100人以上の一行は13年を経過して、帰還したのは張騫と甘父の二人だけであった。

張騫の二度の西域行は、当初の軍事目的は達せられなかったが、中国と西域の交通を拓いた意義は大きい。その結果、中国民族と少数民族の間の経済文化交流は強化され、中国のすぐれた手工業品、織物、漆器等と共に、先進的な農業生産技術、治水技術、冶金や生産工具が西洋へ伝えられた。これらは、西域の経済、文化の発展に重要な意義を及ぼし、世界は拡大された。

参考：史記(孝武本紀、大宛列伝)、司馬遷史記(徳間書店)